

知佳子 令和5年6月度特別作品

春 知佳子

俳句を始めて良かったことの一つが、植物などの名前を知ったことだ。道端や公園の花や木を見て、名前を調べたり人に教えてもらうことで、それまでなんとなく見ていた花や木の違いを知ることができ、視しみが増してきました。李詒集にある花や木を、よく歩く道に偶然見つけた時には、とても驚き、幸せな気持ちになります。身近な四季の自然を楽しむ、かけがえのない喜びを手に入れました。

雨匂ふ初音の道を上りたる

糸桜分ければ朝の雫かな

水音の近くに三葉躑躅かな

深山躑躅どころどころに人動く

露晴れて山の残雪現はるる

手を伸ばすすぐその先に春の月

小手毬の花に川風吹きにけり

花公孫樹その向うには昼の月

近寄りて枝先触るる花楓

黄水仙畑の境あいまいに

《作品鑑賞》

すみれ

知佳子さんの俳句の感性にはいつも驚かされ、「こんな観点を捉えている」と感心させられる。この「春」という作品は、春の情景と花で瑞々しい様子が詠まれていて、美しく喜びの溢れている作品となっている。

雨匂ふ初音の道を上りたる

先ず（雨匂ふ）が知佳子さんの感性である。

糸桜分ければ朝の雫かな

朝の雫を持ってきたことにより瑞々しい作品となった。

深山躑躅どころどころに人動く

とどこどころと表現することで情景が鮮明になった。

黄水仙畑の境あいまいに

畑の境あいまいに、という観点で俳句ができるという発想に魅了させられた。良い刺激を頂き、いい作品に出会い心が洗われた。

山莊 辻純江

私が俳句を作るようになったのは、主人の転勤で、東京から長野県諏訪市に暮らすようになった時、友人に誘われて小さな句会に参加したことが始まりです。自然豊かな地で、楽しい仲間と毎週、句会を開き、俳句の魅力に引かれていきました。再び、東京に転勤になった時、諏訪を去りがたくて小さな山莊を手に入れ、通うようになりました。それから三十五年、俳句会はなくなりましたが、今も、年に数回、山莊に通っています。

桜葉降つて山莊開きけり

百千鳥蓼科山の穂やかに

諏訪湖へと流るる川や葦の角

石楠花の花の咲きたる休暇かな

落葉松の若葉朝食外で取る

林檎咲き諏訪湖に波の立ちにけり

雉鳴くや鳳凰三山荒々し

蛙鳴く水田に映る駒ヶ岳

鶯の綺麗に鳴くや四月尽く

山莊を用づ鶯に別れ告げ

《作品鑑賞》

松田裕子

句会ではじめて辻さんにお会いした時、俳句に精通した方だと直感いたしました。諏訪に山莊をお持ちとのこと。人生を謳歌し、美しい大自然の中で感性豊かな俳句を生み出しておられます。

桜葉降つて山莊開きけり

桜葉が降る頃はようやく諏訪も春を感じる季節になり、待ち望んでいた山莊を開けることができます。その喜びを、この素直な句からしっかり感じとることができます。

百千鳥蓼科山の穂やかに

春から夏にかけて鳥たちの恋の季節です。美しい声であちらこちらで囀っています。その中で蓼科山は、若葉輝く山となり、いつもとかわらず穏やかな美しい曲線を見せているのです。この絶妙な対比が上手いなど感じ入りました。

落葉松の若葉朝食外で取る

落葉松林は本当に美しく、自然美の醍醐味を感じます。春の若葉、秋の紅葉と、見る人に感動を与えます。若葉を見ながら外での朝食。なんと贅沢なことでしょう。自然に魅せられた作者の喜びを感じます。

山莊を用づ鶯に別れ告げ

鶯は春から初夏にかけて美しく鳴きます。鳴き始めた鶯に未練を残しながら、山莊を閉じるのです。また来るからねと声をかけて。